

# 「なにはつ」歌の木簡

## —平仮名が生まれる頃—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

**はじめに** 2014年、京都市中京区壬生朱雀町の発掘調査で、一つの木簡が出土しました(写真1)。木簡の文字は、墨がかすれて読みにくいところもありますが、次の歌が仮名文字で記されていました。

「難波津に 咲くやこの花 冬こもり 今は春べと 咲くやこの花」

この難波津の歌は『古今和歌集』の序文で、安積山あさかやまの歌とともに歌の父母のような存在であり、手習いを学ぶ人がまず初めに書く大事な歌として紹介されています。

この木簡は、平安京左京四条一坊二町で見つかった円形木枠の井戸から9世紀後半の土器とともに出土しました(写真2)。出土状況から、木簡は井戸を埋めるときに土器とともに廃棄されたと思われます。木簡の時期である9世紀後半は、井戸のほかには溝があるだけではできませんでした。ただし、左京四条一坊二町は、その西側には平安京のメインストリートである朱雀大路すまろが通っています。朱雀大路沿いということから、この場所には皇族や高位の貴族邸宅、または公的な施設が存在した可能性が考えられます。

**出土した木簡** 木簡の大きさは、長さ34.5cm、幅3.5cm、厚さ4mmです。上下が折れているので、本来はさらに長かったようです。樹

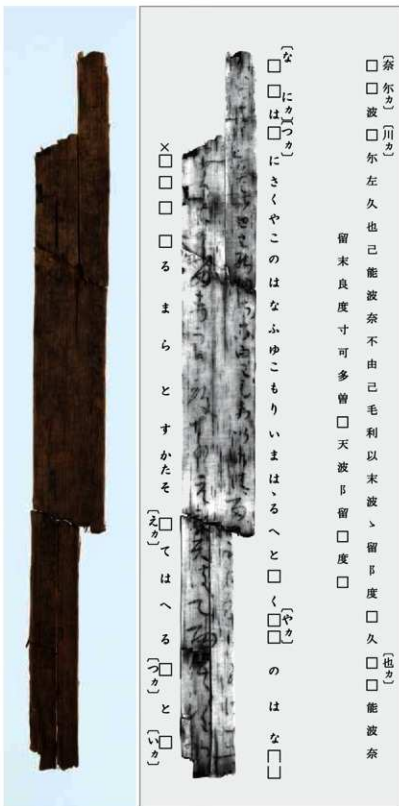


写真1 出土した木簡(左)と赤外線写真・釈文と字母(右)

種はヒノキです。木簡には2行にわたって仮名文字が記されており、右行に「なにはつ」の歌の全文の31文字が、左行は右行よりもやや大きい文字で21文字が記されていることが確認できます。左右行ともに、文字はさらに下に続いているようです。左行には「はべる」(侍る)の文字があることから、歌ではなく文章であることがわかりますが、残念ながら左行全体の意味はよくわかりません。

**仮名文字のなりたち** 木簡に記された文字は、一見して楷書による漢字ではなく、崩した文字であることがわかります。奈良時代の日本語表記は、中国で生まれた漢字の音を借りて一字一音で行なっていました。「万葉仮名」と呼ばれるものです。「仮名」の「仮」は「かり」であり「名」は「字」のことです。本来は表意文字である漢字を、字の音だけを借りた文字ということから「仮名」と呼ばれるようになりました。万葉仮名はひとつの音に多くの漢字が使われていました。例えば「ア」だけでも、「阿・啊・安・足」などがあり、万葉仮名は全部で1000文字もの漢字が使われていました。

これらは次第に文字を崩して書くようになり、これと並行して崩す漢字も限定されていきます。こうした過程を経て「安」の文字から平仮名の「あ」が生まれていくことになります。このような平仮名のもとになった漢字を「字母」と呼んでいます。平仮名の原形ができてくるのは9世紀代、平仮名47文字の手習い歌である「いろは



写真2 木簡が出土した井戸(右上に木簡)

歌」は10世紀末から11世紀中頃に成立したと考えられているので、この間に平仮名はほぼ完成したといえます。今回の木簡に記された右行の「ふゆ」の文字に注目してみると、「ふ」は現在の平仮名と同じ形をしています、「ゆ」はほぼ漢字のままです。まだ平仮名が完成していないことがわかります。

**難波津の歌** これまでも木簡のほかに土器や瓦などの発掘資料や建築部材などに記されたものが確認されており、今回のものを合わせると38例になります。最古のものは7世紀代に遡り、長く歌い継がれた歌であることがわかります。木簡に記された歌は、難波津以外にもあります。それらの木簡は、貴族が儀式などの際に手に持って唱和するためのものと考えられています。しかし、今回出土した木簡は、左行に文章が記されていることから、それとは異なる目的で使われたものと考えられます。

右行の歌の注釈や評論を左行に記した可能性も考えられます。

『古今和歌集』が紀貫之らによって編まれたのが延喜5年(905)で、その序文の「仮名序」は平仮名を使用しています。今回の木簡の時期である9世紀代は、平仮名の原形ができる頃、その成立前夜といえます。この時期、どの漢字をどのように崩して平仮名が生まれていくのか資料が少なく、解明されていない部分があります。平安京の西三条第(藤原良相邸)出土の墨書土器など、9世紀代の平仮名の原形とみられる文字にも読むことができないものがあります。

**まとめ** 難波津の歌は古代のスタンダードナンバーであり、今回の31文字に読み間違いは考えられません。今後、この31文字をほかの未解読の平仮名文字資料と比較検討することで、平仮名の成立過程が明らかになっていくことが期待されます。(南 孝雄)